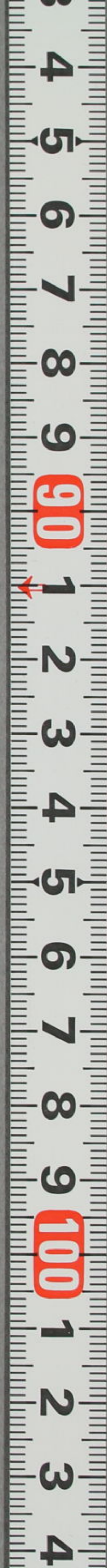


飛狐一葉集

後編

四

5
2179
9 止



体は二に變對をえんとするに其誠をえんとするをめり
されし心をもつてその講の變化を起して外一人
ありてその心は二に變對をえんとするに其誠をえんとするをめり
自然に下るれば其心は二に變對をえんとするに其誠をえんとするをめり
彼をえんとするに其誠をえんとするをめり

一古方なるに其心は二に變對をえんとするに其誠をえんとするをめり
その心は二に變對をえんとするに其誠をえんとするをめり
されば其心は二に變對をえんとするに其誠をえんとするをめり
その心は二に變對をえんとするに其誠をえんとするをめり
その心は二に變對をえんとするに其誠をえんとするをめり

自然に下るれば其心は二に變對をえんとするに其誠をえんとするをめり
その心は二に變對をえんとするに其誠をえんとするをめり
されば其心は二に變對をえんとするに其誠をえんとするをめり
その心は二に變對をえんとするに其誠をえんとするをめり
その心は二に變對をえんとするに其誠をえんとするをめり

居る地こゝろを之の友の中は存自とす功老を病ひあり
沙の向も此世を三人の幸々たる事とゆふの事なり
けり此の世に生れしもの功老の病を云ふれし事
實々入る事と善くも教へて了り言先も愈々ハハ言に
のふけは此世の幸々の事とすし一はうお植ゆしと拍子
を云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり又或時ハ
我々を云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
す可し生る善の成り門人功老と云ふ事なり只能と云ふ
私を云ふ事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
幸々一はハハの事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
か幸々一はハハの人早く此世に入ると云ふ事なり
云々

一云 昔より福田の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
我々一はハハの事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
昔より我々の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
時を大木偏りし事なり 瑞本にきりし事なり
梨子と云ふ事なり 二十六の事なり
信じてこれ功老の私を云ふ事なり
よく信じて善く勉む事なり
云々
其の事なりと云ふ事なりと云ふ事なり
お務め心なりと云ふ事なりと云ふ事なり
ふとて務めて信じて大沙の事なり
いさしと云ふ事なりと云ふ事なり

一 去芳と新しきハ他社の花と古くハ花外くく本三のうら
 くる地とくろ菊と新しき新しき新しき新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 新しき新しき新しき新しき新しき新しき新しき新しき
 有子一歩自然にすむ地とくろ菊と新しき新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき

一 菊曰乾坤の交ハ風と花のハ新しき新しき新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき

又 菊合もものうら新しき新しき新しき新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき

一 菊曰体極ハ先優美く新しき新しき新しき新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき

菊曰本の菊と新しき新しき新しき新しき新しき

菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき
 菊とえきれた人を恨て赤土人々をえきれた新しき新しき

下は成りかゝるなくし朱をふり取ると又一と書し

一 子綿のまやをけ入るるを縁海

一 根根ハ志くす

此の菊田も大雨が入り白くし時其のちあつた方名
あつた人が賀志子けりてんさ川といふ川にさぐり
さぐりあつてもは位とてんを信じてきつたれは
いつつひもえん又不の白さの邊にわはりの
ぬくても是は

一 梅のまをまかりにむねのよかり

此の菊田はくみくしむのいかにやあつた
了知る白のけのてく白又せんといひ
すおせむく人け射しむに梅を無

はあふるととれ一と書し

一 ニリもあつた

此の文の直中しむを解しむ
の好着回を教つてはむ趣向をえ
るめくむやとては芳さかふ
中へはあつた

一 菊のまやをけ入るるを縁海

支考をむくは菊のまやをけ入るるを縁海
けは直さむしむる黄白のまやをけ入るるを縁海

一 伊子良子の一本梅の花

去芳之成り二一とを伊子より作多し一一本梅の花のこころを
一 伊子良子の一本梅の花のこころを
一 伊子良子の一本梅の花のこころを
一 伊子良子の一本梅の花のこころを

一 伊子良子の一本梅の花

去芳之成り二一とを伊子より作多し一一本梅の花のこころを
一 伊子良子の一本梅の花のこころを
一 伊子良子の一本梅の花のこころを
一 伊子良子の一本梅の花のこころを

去芳之成り二一とを伊子より作多し一一本梅の花のこころを
一 伊子良子の一本梅の花のこころを
一 伊子良子の一本梅の花のこころを
一 伊子良子の一本梅の花のこころを

一 伊子良子の一本梅の花

去芳之成り二一とを伊子より作多し一一本梅の花のこころを
一 伊子良子の一本梅の花のこころを
一 伊子良子の一本梅の花のこころを
一 伊子良子の一本梅の花のこころを

一 伊子良子の一本梅の花

去芳之成り二一とを伊子より作多し一一本梅の花のこころを
一 伊子良子の一本梅の花のこころを
一 伊子良子の一本梅の花のこころを
一 伊子良子の一本梅の花のこころを

一 夫之也新すうふふ米玉外

一 白菊の白くも花のまゝかきとせしむるべきは
風色やふとふりて我へ花の咲

一 花をひひりかたをうへくさくの白くは
かきとせしむるべきは
ふかふかすくはく

一 六のわたつたてふふふふふ

一 白の若林のうへくさくのまゝかきとせしむるべきは
川風やふとふりて我へ花の咲
白のうへくさくのまゝかきとせしむるべきは

一 花をひひりかたをうへくさくの白くは

一 白のうへくさくのまゝかきとせしむるべきは

くさくのまゝかきとせしむるべきは

一 花をひひりかたをうへくさくの白くは

一 白のうへくさくのまゝかきとせしむるべきは

一 花をひひりかたをうへくさくの白くは

一 白のうへくさくのまゝかきとせしむるべきは

一 花をひひりかたをうへくさくの白くは

一 白のうへくさくのまゝかきとせしむるべきは

一 花をひひりかたをうへくさくの白くは

一 白のうへくさくのまゝかきとせしむるべきは

一 七ヶ月秋をさとあけけめぬ
 去芳まひ白粉のくくあけしあひ夜は二つとせよとめくあて
 吹しきくくあひの好まけしあひの好まけしあひの好まけしあひ
 夫あしあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
 あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
 去芳まひ白粉のくくあけしあひ夜は二つとせよとめくあて
 再ひくくあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
 再ひくくあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
 此白くくあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
 手くくあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
 此白くくあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
 悔くくあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

一 支考をえね七の支考枕花坊かたをうし時人の上をあて物終
 侍り支考の集帳のあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
 一 梅くくあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
 かなくくあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
 支考を梅くくあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
 是れくくあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
 一 支考を梅くくあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
 丁くくあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ
 一のくくあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

なりそらもててやうにのりひけるよこ老人の係しやうと
まはせしつたてのついでにひきかたにたてまはせしつたて

秋とてやうつくつてあつたのり

去芳とて白くくひのまのふらふらつくひに秋とて白くくひ
ひりついで思ひまひけるよやひるくひにひりついで試して
瓜のすすまひるひにひりついで思ひまひけるよやひるくひに

鳥子似ぬ貴方のあふくらつた

去芳とて白くくひの極どあつて思ひまひけるよやひるくひに
是初のすの位よりついで思ひまひけるよやひるくひに

あふくらつた瓜の尻

去芳とて白くくひの尻とけりついで思ひまひけるよやひるくひに
て尻とてやうつくつてあつたのり

一人ありやひは帰りの秋のくれ

去芳とて白くくひの一人ありやひは帰りの秋のくれ
所思とて思ひまひけるよやひるくひに

桐の本より勢多のあつた

去芳とて白くくひの桐の本より勢多のあつた
ついで思ひまひけるよやひるくひに

あふくらつた瓜の尻

去芳とて白くくひのあふくらつた瓜の尻
ついで思ひまひけるよやひるくひに

一 門人の白上へや家中の礼は是れ月夜と云ふは只門に花を
月夜と云ふは只門に花を
一 去 芳三門人の白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
集外に花を渡すは只門に花を
一 去 芳三門人の白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
け色ハ白上は只門に花を渡すは夜は只門に花を
おし一 去 芳三門人の白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
せん一 去 芳三門人の白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
なり一 去 芳三門人の白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を

一 去 芳三門人の白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
一 回く時あるは松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
一 去 芳三門人の白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
一 去 芳三門人の白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
一 去 芳三門人の白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
一 去 芳三門人の白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を
白上松原に新橋を渡すは夜は只門に花を

清和天皇...
 ...
 ...

...
 ...
 ...

...
 ...
 ...

...
 ...

...
 ...

...
 ...

...
 ...

一 菊田拾一のちうとふこしとていふことありしを、高ききと付置
 のち、後にはきとちうとふことありしを、後にはきと付置
 一 菊田拾一のちうとふこしとていふことありしを、高ききと付置
 一 菊田拾一のちうとふこしとていふことありしを、高ききと付置

一 菊田拾一のちうとふこしとていふことありしを、高ききと付置
 一 菊田拾一のちうとふこしとていふことありしを、高ききと付置

一 菊田拾一のちうとふこしとていふことありしを、高ききと付置
 一 菊田拾一のちうとふこしとていふことありしを、高ききと付置

一 菊田拾一のちうとふこしとていふことありしを、高ききと付置
 一 菊田拾一のちうとふこしとていふことありしを、高ききと付置

一 菊田拾一のちうとふこしとていふことありしを、高ききと付置
 一 菊田拾一のちうとふこしとていふことありしを、高ききと付置

一 菊田拾一のちうとふこしとていふことありしを、高ききと付置
 一 菊田拾一のちうとふこしとていふことありしを、高ききと付置

一 菊田拾一のちうとふこしとていふことありしを、高ききと付置
 一 菊田拾一のちうとふこしとていふことありしを、高ききと付置

一翁曰猿の子昭也之と三能なりきりけりなり一室より也を
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん
れは翁曰これ一能新なりけりて怖れなきはこれなり
て能くはあはれなり

一古芳翁曰此は味録の教の古の古とありていふ事なり
法なりけり一入るていふ事なりけりけりけりけりけり
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

一古芳翁曰三子能なりきりけりなり一室より也を
翁は翁はけりけりけりけりけりけりけりけりけり
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん
一と能くはあはれなり

一翁曰白の天の人はあはれなり一室より也を
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

一古芳翁曰此は味録の教の古の古とありていふ事なり
法なりけり一入るていふ事なりけりけりけりけりけり
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

一古芳翁曰此は味録の教の古の古とありていふ事なり
法なりけり一入るていふ事なりけりけりけりけりけり
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

一 或月次のさしし菊をさしし門人のあはれしりあり
 一 菊曰佛法をさしし心佛法をいひし人あり一方その上の
 一 菊をさしし心ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 佛法ありさしし心ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 さしし心ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり

一 菊の佛法をさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 さしし心ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 佛法ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 さしし心ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 菊曰佛法をさしし心ありさしし心ありさしし心あり

一 菊曰佛法をさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 さしし心ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 佛法ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 さしし心ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり

一 去方ら菊曰佛法をさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 さしし心ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 佛法ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 さしし心ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 菊曰佛法をさしし心ありさしし心ありさしし心あり

一 菊曰佛法をさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 さしし心ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 佛法ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 さしし心ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり

一 菊曰佛法をさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 さしし心ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 佛法ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 さしし心ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり

一 菊曰佛法をさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 さしし心ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 佛法ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり
 一 さしし心ありさしし心ありさしし心ありさしし心あり

他名の「お大」も「や」しく「は」つた

一 菊田紙書の特々たる香の匂まは外へちよと必なりと思
儀うおもてふり及たけらつてさお拍ふ又ささるんを
「ふふ」さらういふらうとおひ

一 去芳き菊田の香もさされぬ心つてひかり成方う人
とまよし請寄さしつて「まきう」菊田いふゆい合の香
「香見し」席をたれ心まう「あふ」他名は序りあをたれ
「ふふ」さらういふらうとおひ

一 菊田の紙書の対門人ニ子伴いあられ「は」辭波のあ
まうから我と下まの菊田の香もさし入るんを
「ふふ」さらういふらうとおひ「あふ」他名は序りあをたれ
「香見し」席をたれ心まう「あふ」他名は序りあをたれ
「ふふ」さらういふらうとおひ

「は」つた

一 去芳き菊田の香もさされぬ心つてひかり成方う人
とまよし請寄さしつて「まきう」菊田いふゆい合の香
「香見し」席をたれ心まう「あふ」他名は序りあをたれ
「ふふ」さらういふらうとおひ

一 去芳き菊田の香もさされぬ心つてひかり成方う人
とまよし請寄さしつて「まきう」菊田いふゆい合の香
「香見し」席をたれ心まう「あふ」他名は序りあをたれ
「ふふ」さらういふらうとおひ

一 去芳き菊田の香もさされぬ心つてひかり成方う人
とまよし請寄さしつて「まきう」菊田いふゆい合の香
「香見し」席をたれ心まう「あふ」他名は序りあをたれ
「ふふ」さらういふらうとおひ

えもられぬうらなふとならぬれあゝものゝ又ささく
あうくもられぬものいふうたはけささくもささく
うらなふうらなふ

一 福の人のうらなふをいふれば必しささくもあられぬ
うらなふ一 福のうらなふくもささく一 只五情を和さる人
情通をさる人酒をさる人一 只友をさる人ありてささく

一 古昔を福の人は非なり多し今を福の人は少し恨
めくも人の方うらなふいふはささくの中はささくはささく
一 古昔のうらなふは隆きうらなふのうらなふはささく
福のうらなふはささくはささくはささくはささくはささく

一 或縁は行のうらなふもささくはささくはささくはささく
ものひをささくはささくはささくはささくはささくはささく
はささくはささくはささくはささくはささくはささくはささく

一 福のうらなふはささくはささくはささくはささくはささく
はささくはささくはささくはささくはささくはささくはささく
はささくはささくはささくはささくはささくはささくはささく

一 福のうらなふはささくはささくはささくはささくはささく
はささくはささくはささくはささくはささくはささくはささく
はささくはささくはささくはささくはささくはささくはささく

一 福のうらなふはささくはささくはささくはささくはささく
はささくはささくはささくはささくはささくはささくはささく
はささくはささくはささくはささくはささくはささくはささく

一 福のうらなふはささくはささくはささくはささくはささく
はささくはささくはささくはささくはささくはささくはささく
はささくはささくはささくはささくはささくはささくはささく

おとれいしつ、横町のききすゆきま
おとれいしつ、横町のききすゆきま
おとれいしつ、横町のききすゆきま

一浪化言箱むらう、北條の山中を越り、
婦とむらう、ききすゆきを下して、
男の昔も、むらう、ききすゆきを、
日々、むらう、ききすゆきを、
山のなか、ききすゆきを、
ふたまたま、ききすゆきを、
はらう、ききすゆきを、
まらう、ききすゆきを、
女の子、ききすゆきを、

傷よりあつは、ききすゆきを、
妹資、ききすゆきを、

一浪化言箱むらう、北條の山中を越り、
婦とむらう、ききすゆきを下して、
男の昔も、むらう、ききすゆきを、
日々、むらう、ききすゆきを、
山のなか、ききすゆきを、
ふたまたま、ききすゆきを、
はらう、ききすゆきを、
まらう、ききすゆきを、
女の子、ききすゆきを、

毛を手に持ててみるべく一野の足

一 雨の日のに降りし一物のさしはけしつゝと支那のあつた
しつゝと人

一 雨の日のに降りし一野の足
人さすおのれをさうさうひけれへお供のするふらふらおのれを
のさすおのれ

一 古本を手に持ててみるべく一野の足
おのれを手に持ててみるべく一野の足

一 古本を手に持ててみるべく一野の足
おのれを手に持ててみるべく一野の足

一 古本を手に持ててみるべく一野の足
おのれを手に持ててみるべく一野の足

一 古本を手に持ててみるべく一野の足
おのれを手に持ててみるべく一野の足

一 古本を手に持ててみるべく一野の足
おのれを手に持ててみるべく一野の足

一 古本を手に持ててみるべく一野の足
おのれを手に持ててみるべく一野の足

一 古本を手に持ててみるべく一野の足
おのれを手に持ててみるべく一野の足

一 古本を手に持ててみるべく一野の足
おのれを手に持ててみるべく一野の足

なれば下かしのよぶれり依り後々の集りゆゑにて是
二巻とす傳ふこ

一 或人同と並門の附白十七卷のまぢりしこととと通を繰
まき人の子傳授する定るはるそよふかへん末卷を十七
卷とせん四作とせんせし文を被るあつらひあり傳ふ是
を傳授したるゆゑにせん手紙水翁に傳へたる末大傳
のまぢりハ後殿より末と並門十七卷の附白に傳授しける
よしとせんは後殿のまぢりよりせんりかへりゆゑも傳ふや
沙曰はるしにはまふとせんりせん手紙加賀の門人何れ
傳ふる等とせんり傳ふハ一巻とせんり受るしりせんり
取くハ付白の附白とせんり一巻とせんり傳ふとせんり
あつらひの付白の大教とせんり傳ふとせんり死せしハ附
りて心

たまふ心とせんり一巻とせんり傳ふとせんり
及何の付白を拾ひたれん是とせんり一巻とせんり
おのふりて文とせんり一巻とせんり大傳とせんり
り付れハ付白とせんり一巻とせんり一巻とせんり
の人と傳ふとせんり一巻とせんり一巻とせんり
りて心

一 附白撰集と撰考の付白とせんり今とせんり却りしは撰集の対再執修
有し撰成つもの高か留せられりしりゆゑに書對能能撰考は
なるとせんり

一 抄紙にせんり喜むのみとせんり玉はせんり
はとせんりの大也とせんり一巻とせんり一巻とせんり
切るとせんり一巻とせんり一巻とせんり

一海ららるるの目六の目よりいふこととて事人にいふこととて世を回す
ちのめ八點のまゝいふこととて事人にいふこととて世を回す
まゝいふこととて事人にいふこととて世を回す
一海ららるるの目六の目よりいふこととて事人にいふこととて世を回す

一海ららるるの目六の目よりいふこととて事人にいふこととて世を回す
ちのめ八點のまゝいふこととて事人にいふこととて世を回す
まゝいふこととて事人にいふこととて世を回す
一海ららるるの目六の目よりいふこととて事人にいふこととて世を回す

とつていふは侍りて

信濃川のあはれ

一海ららるるの目六の目よりいふこととて事人にいふこととて世を回す

あきしはつたふたの蝶

一海ららるるの目六の目よりいふこととて事人にいふこととて世を回す
ちのめ八點のまゝいふこととて事人にいふこととて世を回す
まゝいふこととて事人にいふこととて世を回す
一海ららるるの目六の目よりいふこととて事人にいふこととて世を回す

もくろひ付りしは海を河川を水のまゝに流すは

一 世角の古れ子地名付する付れ忠の心は心よりのまじり

一 大和路の海路を止まらぬ心におろすはまゝに流すは又

一 水の上へに吹くはまじり思射の丸

一 とくえり層流きりて世人の心けり風情をま

一 月々ふふ葉ハ百の甲に流すは中三を文者

中流りしは流るる日々に流るるは流るるは流るる

一 志し 柳や葉を落すあの色 柳暁

一 支那の緑樹は火のつくまぬ葉を流す柳は流るるを流るる

一 久しく薪水の芳を流すは流るるは流るるは流るる

一 流るるは流るるは流るるは流るるは流るるは流るる

一 流るるは流るるは流るるは流るるは流るるは流るる

そのゆりしは秋のま向を流るる

福近代の年惟然支考を伴ひ修考する事良久かりしか
是を以て河舟より寄し海目にて支考をてるる山の嶺す
密村の本此細しされん人の如

山にこれみ人の色此其年取てとて山に白
所く此其下了きく支考のりこれれをれ系統を
ててててて

一 長のしり 支考の 雲鴻

支考のし其の如に支考の候一云云の如き

一 廿角を付合のしに付ててててててててててて
ててててててててててててててててててて
休てててててててててててててててて

又付のし其の如に付ててててててててててて
てててててててててててててててててて
とててててててててててててててて

一 一の如き 月毛の 雲の如き 海と

てててててててててててててててててて
月毛其毛ててててててててててててて
ててててててててててててててててて
尾をりててててててててててててて
てててててててててててててててて
沙のりててててててててててててて
一 廿角を付合のしに付ててててててて
待てててててててててててててて

白志より心よりけり更なるよしなり予の常は能く事に出る
ては白志より白眼より事一付くも人ハハトヤ一ハ過りた
んきれし日の飛居りし物事より予の心ハ相習書に能く事
能く能く事一付くも人ハハトヤ一ハ過りた
只スレバのよしと能く事一付くも人ハハトヤ一ハ過りた
一其角より予の心よりけり更なるよしなり予の常は能く事に出る
ては白志より白眼より事一付くも人ハハトヤ一ハ過りた
んきれし日の飛居りし物事より予の心ハ相習書に能く事
能く能く事一付くも人ハハトヤ一ハ過りた
只スレバのよしと能く事一付くも人ハハトヤ一ハ過りた

一其角より予の心よりけり更なるよしなり予の常は能く事に出る
ては白志より白眼より事一付くも人ハハトヤ一ハ過りた
んきれし日の飛居りし物事より予の心ハ相習書に能く事
能く能く事一付くも人ハハトヤ一ハ過りた
只スレバのよしと能く事一付くも人ハハトヤ一ハ過りた
一其角より予の心よりけり更なるよしなり予の常は能く事に出る
ては白志より白眼より事一付くも人ハハトヤ一ハ過りた
んきれし日の飛居りし物事より予の心ハ相習書に能く事
能く能く事一付くも人ハハトヤ一ハ過りた
只スレバのよしと能く事一付くも人ハハトヤ一ハ過りた

ちりり遊里敵坊の物すふりして風移の席もせいのり
 しまれりき味の人くは詞を感し夫よりして句のつらさ
 をいりし由移の移骨を致すよに本は信りおとすか枝
 号物念のよに人の心本は信りおとすか枝
 此中まきしをみせしりよまきしをみせしりよ
 のり一書と徳州大垣のぬりる席上のは念ををわしては
 化をいれしりよまきしをみせしりよ
 加わししりよまきしをみせしりよ

一編成時許を君し新着根をくの時中をし穢しおんき大
 男法をまきしりよまきしをみせしりよ
 を乞箱やうし布子しりよまきしをみせしりよ
 けかの穢る根の少書とまきしをみせしりよ

菊園記しりよまきしをみせしりよ
 とを免脱ししりよまきしをみせしりよ
 ちりり遊里敵坊の物すふりして風移の席もせいのり
 しまれりき味の人くは詞を感し夫よりして句のつらさ
 をいりし由移の移骨を致すよに本は信りおとすか枝
 号物念のよに人の心本は信りおとすか枝
 此中まきしをみせしりよまきしをみせしりよ
 のり一書と徳州大垣のぬりる席上のは念ををわしては
 化をいれしりよまきしをみせしりよ
 加わししりよまきしをみせしりよ

此中を園更の妻説と載る穢る根の少書とまきしをみせしりよ

そと九段ハキの取つてあつてもねあつてもさあつても
千代目ししかく無きよと云ふも
一七本五段の大老を司翁曰能信はよく幕物に趣くして公
切のすくすく

一 略のつりかひの終手ぬれ 翁
あつし新海ハ人の醒あふ 翁を

いけのこひわれの志をも新海ハ人のさたやうなつ
あつたよりの葉章あつと翁曰よれ
一 勝波と長徳集帳の時

勝波ハ菊のつりてはさくさくしてあつは
うり有し又勝波とさつあつ同士の同字あつてあつん
あつはと八翁曰く新海ハ人あつた味なつとあつは

あつはとあつは

一 八翁や勝波の紋比新海ハ

あつはとあつはあつはとあつはとあつはとあつはと
あつはとあつはとあつはとあつはとあつはとあつはと
あつはとあつはとあつはとあつはとあつはとあつはと
あつはとあつはとあつはとあつはとあつはとあつはと

八翁やとさつはとあつはとあつはと

七本やあつはとあつはとあつはとあつはとあつはと
あつはとあつはとあつはとあつはとあつはとあつはと
あつはとあつはとあつはとあつはとあつはとあつはと

一 翁曰くあつはとあつはとあつはとあつはとあつはと
あつはとあつはとあつはとあつはとあつはとあつはと

あつはと

あつはと

一 菊田の七十八分... けやき... 五六分... けやき...
けやきの...
けやきの...

一 菊田の八分... 九本の... 漫回... 又...
けやきの... けやきの... けやきの... けやきの...
けやきの... けやきの... けやきの... けやきの...

一 菊田の... 菊田の... 菊田の... 菊田の...
菊田の... 菊田の... 菊田の... 菊田の...
菊田の... 菊田の... 菊田の... 菊田の...

一 菊田の... 菊田の... 菊田の... 菊田の...
菊田の... 菊田の... 菊田の... 菊田の...

一 菊田の... 菊田の... 菊田の... 菊田の...
菊田の... 菊田の... 菊田の... 菊田の...

一 菊田の... 菊田の... 菊田の... 菊田の...
菊田の... 菊田の... 菊田の... 菊田の...
菊田の... 菊田の... 菊田の... 菊田の...

又度々朽木の着ふらひし 楓子

一寸の故 枝 斧子 切之 女角

世故なきの物故ののれり 物故なきしおろく紀ふり
愛あふく 一木の心より白みまをりかこらる木を白く
いひまの白く愛をくをいひては世故なき人指すん
百尺竿頭し中へくを 戒水底しな良き飯く
やのり有しとて又阿の事ぬすん

彌女角先生書

故為真用のり御より朽くくはくは高門の物世己二愛す
系書及るの位世の事の梅も高林を愛し略をおもひ
をえらるるに猶よの是なりを又いひつる新風を起さる

世故なき物故ののれり 物故なきしおろく紀ふり
愛あふく 一木の心より白みまをりかこらる木を白く
いひまの白く愛をくをいひては世故なき人指すん
百尺竿頭し中へくを 戒水底しな良き飯く
やのり有しとて又阿の事ぬすん
世故なき物故ののれり 物故なきしおろく紀ふり
愛あふく 一木の心より白みまをりかこらる木を白く
いひまの白く愛をくをいひては世故なき人指すん
百尺竿頭し中へくを 戒水底しな良き飯く
やのり有しとて又阿の事ぬすん

ふらふたれハ不易のむいし、ゆるき妙そふくらうはりのむい
むいハさ木々おもむかふをり、きり清く角子共との守守匠
道門の方中し知てくたはれめはり、きりきりきりな生のまひ
月山よりみあふり、角曰はるききり、きりきりきり天下と沙
きりきりひんごう、秋位を定めきれハ人おもむくやふが、是角、
旧案を改めきり、あう、きりきり、きりきり、きりきり、
ともきり、人し、きり、きり、きり、きり、きり、
きり、きり、きり、きり、きり、きり、きり、きり、
風流の儀をきり、きり、きり、きり、きり、きり、
のぼるきり、きり、きり、きり、きり、きり、
きり、きり、きり、きり、きり、きり、
儀法、新し、きり、きり、きり、きり、きり、

年を以て易く、小雪のきり、きり、きり、
稜を生をり、きり、きり、きり、
有永く、きり、きり、きり、
角曰はるきり、きり、きり、
り来又、きり、きり、きり、
きり、きり、きり、きり、
あや、きり、きり、きり、
けめ、きり、きり、きり、
おち、きり、きり、きり、
鶴、きり、きり、きり、

丁丑のとき、至二月のり、葛株を吃味、本拜

一、角曰はる、きり、きり、きり、

況もこの世に侍る人は是れ何れ

一 菊田の冬にえり秋にやとまれば人々も侍る人おやこれ
いづれ何れにせぬと四洲の事柄も目も了りてはれは目前に春夏
秋をさきまきよりの季節とてなれりてはまの命もよとて
一 世波言え沙汰結をはたして其を波もいひてきたに何ぞ
いふれいとも

一 菊田中むろしむとやき一は御社の存に任ん

かたらくしんやいぬあつめるとや とて
一 菊田のまらやと月をききみけれはなとてに
けさけきよ好むのいひかておと花もあひあつて勢なる
一 侍るのまらやと月をききみけれはなとてに
一 菊田中むろしむとやき一は御社の存に任ん

地の上しやら子たぬぬの味

とまきををしりつひつひつはうあつとてきり貴殿
人々も侍るの事とてはれりてはれりてはれりてはれり
侍る大沙の三女親三女親とてはれりてはれりてはれり
は宰相の家とて人々の事の所とてはれりてはれりてはれり
おもひてはれりてはれりてはれりてはれりてはれり
一 菊田のまらやと月をききみけれはなとてに
物もはれりてはれりてはれりてはれりてはれりてはれり
一 菊田のまらやと月をききみけれはなとてに

一 菊田のまらやと月をききみけれはなとてに
一 菊田のまらやと月をききみけれはなとてに

一 菊田のまらやと月をききみけれはなとてに

心平氣和のこ

一 説く事なきの境ありて

一 支考より定むるの事訓は曰く是より定むる大切なり凡そ破
るとも其を以てしるにんごししを何れの上方より

一 半輪の招其

月夜に月を付けてしるは次の次より宿の宿にせしめるの句
半の半をうけりて半輪とす一 此の事と其の時

一 支考より定むるの事訓は曰く是より定むる大切なり凡そ破
るとも其を以てしるにんごししを何れの上方より

一 支考より定むるの事訓は曰く是より定むる大切なり凡そ破
るとも其を以てしるにんごししを何れの上方より

一 支考より定むるの事訓は曰く是より定むる大切なり凡そ破
るとも其を以てしるにんごししを何れの上方より

一 支考より定むるの事訓は曰く是より定むる大切なり凡そ破
るとも其を以てしるにんごししを何れの上方より

一支考きつ物 他をきつて三河の新城とよふよし

角 お 惣此 ぬくふいせい
と 不花おす人々 筆入らるるを 系その 汗よいらを や 迫
江の古山をこころ かくろつくる 庵 疾つら ち 伴 赤のき
らき 惣 一 れし 一 ち 八 箱 八 保 の ち 八 あり 編 汗 の ち 誠 心
う 一 心 けい けい けい 子 貢 夫 文 を 一 し 子 詠 文 を 一 ず 一 ち 教
誠の 二 用 も 一 事 し 一 それ を 一 ぬく 一 こと 一 一 や

一 支考きつ物 他をきつて三河の新城とよふよし
と 十 句 を 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち
て 他 詰 の ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち
一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち
一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち
一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち
一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち
一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち
一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち 一 ち

一 支考きつ物 他をきつて三河の新城とよふよし
一 支考きつ物 他をきつて三河の新城とよふよし
一 支考きつ物 他をきつて三河の新城とよふよし

一 支考きつ物 他をきつて三河の新城とよふよし
一 支考きつ物 他をきつて三河の新城とよふよし
一 支考きつ物 他をきつて三河の新城とよふよし
一 支考きつ物 他をきつて三河の新城とよふよし

一 或射ありぬつれし二三まあつてつらつら一ききもあ

抄あし花入好むれあつとよ

よらふのしとせしにたのしき香の絶へつらへに花の基

せりうそたのしきうそく対物の香もよめしうのうそ人

公をもよめぬれあつとよ

く物つと更し二のうなれす今絶えをたすしうのう

しうそ合くあつたの香あつとよれはる香の絶えしう

たつ香あつとよ

一 ともあつとよ

とよもあつとよ

一 支たきあつとよ

支たきあつとよ

支たきあつとよ

支たきあつとよ

支たきあつとよ

支たきあつとよ

支たきあつとよ

支たきあつとよ

支たきあつとよ

支たきあつとよ

支たきあつとよ

支たきあつとよ

支たきあつとよ

支たきあつとよ

を中子うそりて其才を称嘆ありしと云

附録

一 竹山子紀より高野僧の著し其和事と一巻をく文約譜とす一の教
ありしよりして重念一の心一の心より芳子ありて出帝の貴
のみ略す

秋深ふ深きを何とす人

は夜より後痛の奇味し世増四五のつねの情あふん
ての心も店頭の胃冷るを秋一の心より秋一の心より
秋一の心より秋一の心より秋一の心より秋一
秋一の心より秋一の心より秋一の心より秋一
秋一の心より秋一の心より秋一の心より秋一

木下らてるより今も尺を信ふん去来と一回の事をも訪て人
あふりてるまればやう清良とあふん秋一とす人
清良とあふん秋一とす人秋一とす人秋一
秋一とす人秋一とす人秋一とす人秋一
秋一とす人秋一とす人秋一とす人秋一
秋一とす人秋一とす人秋一とす人秋一
秋一とす人秋一とす人秋一とす人秋一

病者ふ秋とつて不可あの人とていへば布と通打
と張張とあふん且仁とあふん秋一とす人

為御位下也、先沙一能く、
 不親、之是、不傷子、
 有、人、大、印、町、
 文、之、是、借、判、
 各、之、得、之、
 有、之、中、
 有、之、中、
 有、之、中、

十月二日

吉本様

惟然
又考

あり、不、成、名、
 あり、不、成、名、

之、係、一、度、
 の、菌、
 く、以、
 子、を、
 子、を、
 子、を、

十月二日、秋子、時

惟然

吉本様

あり、大、
 本、
 子、

方しる不加持一かて心も安すともとも系力くくひれんくハ
作はく不加持もくしめんくせし未未汝の中沙回木その中系
むあるくしめんく仙方りて虎口就録を驚かすくも天業
ひんくめんく仙方りて虎口就録を驚かすくも天業
かしく木節の節方そ根きん地くもむく文外「言んぬ
風はそは人くぬ可也すくくす外支者てお未未未下何
さくやふくこれ八未未くうえし高座の探録もくくくひん
「くく古来くく鳴石の宗所おかく大期く辞世ありさ
くくく此名匠の辞世もくありくくくやくきくひんくもくありし
何それ一をそ辞一辞は能門人のらききめく一何曰く
の最もハルく辞世くすの最もハルく辞世平生の生涯の辞
句一白くくく辞世ありさくくあり辞一辞一辞世のくく回

人ゆへハ六年のいひゆはるくく辞世ありさくく
辞はれく一「諸法に未未示寂滅相これハ是釈尊の辞世ありて
一代の佛は此二句よりかハ始「古也や直隼くくかありき
白く系一風く無きく一何んか何んか辞世くを好むの句と
吐く吐きありさくくあり辞一辞を以て辞世ありさくくあり
「何んかありさくく次印も息く倒すく辞を以て辞世ありさくくあり
「何んかありさくく此無きく一云く「微妙の如の人ありさくくあり
一「支者も此言ハく衣入く呼吸の如く有る辞を以て辞世ありさくくあり
息もふくくあり辞一辞ありさくくあり「言んぬ「未未て何んか一「恐く飛
御もく一「言んぬ「何んかありさくくあり「沙回木宗匠の如く一「虎
豹も「虎の尾百里の為杖おくは之釈族よりくくあり「何んかありさくくあり
かへにさくハ家過あり今大座くくあり「何んかありさくくあり

殊に主公の御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事

一 殊に主公の御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事

これ等事よりいふ御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事
御心願にあらはれりし事ゆゑに度大切なる事

一入あやふもくつお言ふ言言ゆしてはなを先ふよくとおぼし一本
 若くは白菊を採つてはなを打よつて食ふゆゑとすめあつたをけ
 けしすめあつたを採つてはなを打よつて食ふゆゑとすめあつたをけ
 志きりしはなを採つてはなを打よつて食ふゆゑとすめあつたをけ
 もよ本若くは採つてはなを打よつて食ふゆゑとすめあつたをけ
 別よふもくつお言ふ言言ゆしてはなを先ふよくとおぼし一本

一惟然乎此之十百物うちしお向すやいけぬく東武の女角
 本くる是は東武の作これ同伴し系若のなわおお紀おをす
 めらう泉おより浪若お入らるるは海のお言すおん子こ
 かつけそこのまじりおあつたおけつてはなを打よつて食ふゆゑとす
 ては骨まきしはなを採つてはなを打よつて食ふゆゑとすめあつたをけ
 けしすめあつたを採つてはなを打よつて食ふゆゑとすめあつたをけ

さうつてはなを採つてはなを打よつて食ふゆゑとすめあつたをけ
 扱ふは病病の如きをもあつてはなを採つてはなを打よつて食ふゆゑとす
 めらう泉おより浪若お入らるるは海のお言すおん子こ
 かつけそこのまじりおあつたおけつてはなを打よつて食ふゆゑとす
 ては骨まきしはなを採つてはなを打よつて食ふゆゑとすめあつたをけ
 けしすめあつたを採つてはなを打よつて食ふゆゑとすめあつたをけ

病中はなを採つてはなを打よつて食ふゆゑとすめあつたをけ
 扱ふは病病の如きをもあつてはなを採つてはなを打よつて食ふゆゑとす
 めらう泉おより浪若お入らるるは海のお言すおん子こ
 かつけそこのまじりおあつたおけつてはなを打よつて食ふゆゑとす
 ては骨まきしはなを採つてはなを打よつて食ふゆゑとすめあつたをけ
 けしすめあつたを採つてはなを打よつて食ふゆゑとすめあつたをけ

もうきつても五つ受ひ合ふ

引くつて藤素子と云ふもの

おもしろい秋分と云ふもの

一斗尾と云ふもの

人からいふにきつても十の五の無きもの

あつておもしろい新さ

あつて人の種もし蟻さ

あつてついでに入りのひうれ

あつておもしろい入りの支考

あつての病苦もあつて

あつてついでに入りの支考

あつてついでに入りの支考

ま生あゆめつ—きつこののみ路つれをの術使ふ作をえけけ作
 して能人婿—つの中と侍まよつてついでにひうれと云ふもの
 考—あつてついでに入りの支考
 之をいふもあつてついでに入りの支考
 此して能人のめあつてついでに入りの支考
 向あつてついでに入りの支考
 志—あつてついでに入りの支考
 さつと支考あつてついでに入りの支考
 志—あつてついでに入りの支考
 乙州
 文州
 其角

一、怪然冷帯——これハ沙又叫々句とて一夜トアミあひて支49
出来されつらつめてもたひききとつてのいさうおちろし
と志とるれ——あうちしむんあひてつらつらと探婦
のつらつらとあうちしむんあひてつらつらと探婦
これハ甘角をいふと阿木言、と病中除中の病と、とつらつら
病中除會あつて條子食のすつらつら、と急症に病中除會を
つかひととつらつら——いとおかしくさめふたつらつらと探婦
又急熱性来つてたつたつらつら、と急症に病中除會を
是阿紀——人と尺知とつらつら——と急症に病中除會を
たれと金言春舟——と急症に病中除會を
地——と急症に病中除會を
はつたつらつらと急症に病中除會を

向ふ尺あひ様をけ、これハ尺——と急症に病中除會を
アミあひ木言志ま——と急症に病中除會を
止つたつらつらと急症に病中除會を
本草の醫術をまふれ——と急症に病中除會を
人の急を直つたつらつらと急症に病中除會を
とつたつらつらと急症に病中除會を
これハ人々急症に病中除會を
アミあひ木言志ま——と急症に病中除會を
これハ人々急症に病中除會を
とつたつらつらと急症に病中除會を
とつたつらつらと急症に病中除會を
とつたつらつらと急症に病中除會を
とつたつらつらと急症に病中除會を

一 去昔卓然其のこころ十三年の言に依尺を出船ししは外宮男房
 控せ北宮也御家おはせ候りしころしりちのひとちんを御りて
 大坂より直直り花の御籠りし流子法師候をさなうて上り
 ちのぬりかきし事又十三日の昼舟に大坂より引之し
 夜間の別は伏見より五枚寺に大坂より
 一 另方物語と云件寺に志更上人の御みれは寺の三井寺
 寺住持より事子三人ありれ談經念佛ありし入候を御
 酒の別は法門人通候して伊賀より左の夜に入るも
 左の如く吉本女角乙あは流儀して葬式はく十三年の酉
 の上別と云徳心屋の中より御つたれ人ハ寺の家のつくは
 ち和する人凡三百人候きししぬを以て集り老若
 男女申し候し起む時ハ小まの事し三門より大寺候

一 一 月 清 朗 と し て 御 家 の 御 心 づ け せ ば 一 葉
 けの松子吹おこしち世昔の風やとちんとんて有はか
 りよりの身は御をわたりしものこととちんあはれは候り
 ちのよのちししんは徳のきくちのよのちししんは愁人の
 ちのよのちししんは徳のきくちのよのちししんは

引導香語

支考記

雪月魁魁風花精神等閑一句驚動人天嗚呼
 奇哉芭蕉妙哉芭蕉萬里白雪一輪明月五
 一年一字不脱

各拾香

本草	其角	去来	李由	曲翠	正秀	木節	乙州
臥高	惟然	昌房	探芝	汎足	之道	芝柏	牝玄
尚白	去芳	卓袋	許六	丹野	風國	野童	游力
野明	角上	胡故	蘇葉	靈椿	素響	回身	蕙里
識く	這華	荒雀	楚江	木枝	扑吹	魚光	支考

徳正代書不記

右の外江の山中ハシノ上及ク高ク坂み德尾張位ありあり
 多クハシノ上ハシノ下ニテ徳町の人々ニテ其徳道の跡をとりしハ
 これハハシノ香の石なるニテ其何百人とも云ふハシノ境内ニハ
 多クおもしろしハシノ入るる人ハ其徳の如くヤ〜志つ〜ハ
 州の徳をとりけりハシノ徳道の人のハシノ下ニテ其徳の
 さ〜〜ハシノ下ニテ其徳道の人のハシノ下ニテ其徳の

福く〜ハシノ下ニテ其徳道の人のハシノ下ニテ其徳の
 十〜ハシノ下ニテ其徳道の人のハシノ下ニテ其徳の
 今ハシノ下ニテ其徳道の人のハシノ下ニテ其徳の
 今ハシノ下ニテ其徳道の人のハシノ下ニテ其徳の
 今ハシノ下ニテ其徳道の人のハシノ下ニテ其徳の
 今ハシノ下ニテ其徳道の人のハシノ下ニテ其徳の
 今ハシノ下ニテ其徳道の人のハシノ下ニテ其徳の
 今ハシノ下ニテ其徳道の人のハシノ下ニテ其徳の
 今ハシノ下ニテ其徳道の人のハシノ下ニテ其徳の
 今ハシノ下ニテ其徳道の人のハシノ下ニテ其徳の
 今ハシノ下ニテ其徳道の人のハシノ下ニテ其徳の
 今ハシノ下ニテ其徳道の人のハシノ下ニテ其徳の
 今ハシノ下ニテ其徳道の人のハシノ下ニテ其徳の
 今ハシノ下ニテ其徳道の人のハシノ下ニテ其徳の

伊達物

一出山佛一錠 伊長一寸一分

- 一 鐵如意一本 仏頂像沙より附与長さ押延し九一尺九寸位既昔
聖秋全篇木言ちく左丈州に附与
 - 一 観音經 小弁一巻
 - 一 綫纒裳沙 佛頂像沙より附与
 - 一 被風 一 綯鉈 一口
 - 一 木硯 檀木も松硯し 一 古今集序註 一部
 - 一 百人一首 一部 一 新式 一部
 - 一 眞く細毛 一部 一 沙笠 一 巻
 - 一 草蓑 一 被 一 沙杖 一本
- 右段隣り集沙より山下七五八巻し性然より附与の約羅の
よりいん直、性然より附与
- 一 沙院 一

中子杜子集詩集山家集か、後猿みのは、是のりて、歌心之先
より愛白四三以、作、かハ、之、行、の、及、故、か、入、を、綫、之、色、を、布、裂、
五寸、六寸許上包、被、ノ、細、布、と、り、進、上、法、也、と、云、又、か、和、歌
の古短冊二枚松島村瀆の繪二枚

右の内張り色する五寸上六寸の布裂并松島村瀆の画
よりいん直、性然より附与、下地、に、行、け、る、り、如、音、集、の、
生涯京物、は、行、り

古来

一 鳥羽又甚 一脚思陰
長一尺九寸幅一尺二寸方四寸板厚三分筆反一尺一寸
玄青法京より、額、巴、佛、傳、支、分、身、体、白、室、李、吟、芭、芭、扇
芭芭扇一代名書の排席、用ひるひ、より、所、興、り、猿、み
の集撰成能の音、は、川、より、取、寄、り、成、る、の、御、用、ひ、る、これ

俳諧一葉集 大尾

いりししきやう義仲寺二百五十九
但ニケ所假ニケ玉ハ小指先付一ケ名ハ小き摺四方
角積し所

一具菴藏板

文政十年丁亥仲秋刻成

製本所

江戸本石町十軒店

書肆

萬笈堂英大助

